

Hybrid Flexible 型の授業デザインを用いた 英語の授業実践報告

中山 晃¹⁾, 梅本 祥史²⁾

1) 愛媛大学教育・学生支援機構英語教育センター

2) 愛媛大学研究支援部情報システム課

A Report on English Teaching Practice with Hybrid Flexible Course Design

Akira NAKAYAMA¹⁾, Yoshifumi UMEMOTO²⁾

1) English Education Center, Institute for Education and Student Support, Ehime University

2) Information System Division, Ehime University

はじめに

2020（令和2）年度は、世界規模で大きな影響を及ぼした新型コロナウイルス感染症により、その拡大防止のための対応策が、各大学の地域の実情に応じた方法によって講じられてきた。感染拡大防止という観点から、学生は大学構内への入構をしばしば制限され、遠隔同期型または非同期型のオンライン授業が導入され、2021（令和3）年度も引き続き行われている。

授業で使われる遠隔配信の媒体とえば、インターネットを利用した授業形態が中心であり、特に、「オンライン会議システム」を搭載したアプリケーションが活用されている。一方で、学生からは、「大学のキャンパスで、友人との学生生活を少しでも味わいたい」等、対面での受講を望む声も少なからずあるようである。このバランスをとることが容易ではない課題に対して、適切な感染拡大防止策と並行して、学生の満足度を高めるための工夫や手立てが求められていると言えよう。

このような状況下で、十分な感染拡大防止措置を講じつつ、学生の要望になるべく応えられるような授業デザインの有望な手法の一つとして、大学構内での対面授業（以下、対面授業）とインターネットを介した遠隔同期型の授業を組み合わせたHybrid Flexible型授業デザイン（Hybrid Flexible Course Design：以下、「ハイフレックス型」と称する）が注目を集めている。

ハイフレックス型の授業の特徴は、同質性（Equivalency）

というキーワードとともに、次のように整理することができる。

特徴1. 対面授業への参加と遠隔参加のどちらでも同じ質の授業を提供できるという同質性が担保できるので、学習内容や授業進度に両者で差が生じにくい（Beatty, 2019）。

特徴2. この同質性により、同じ質の学習体験が可能となるので、学生による受講形態に対する選択の幅が広がり、学生は日・週・トピック毎に授業への最適な受講形態を選択できるようになる（Beatty, 2019）。

特徴3. 教員は、対面授業への参加と遠隔参加の両方の学生を考慮しながら、同時にパソコンやその周辺機器の操作をしなければならず、同質性を高いレベルで維持しようとすると、それ相応の授業実践スキルが求められる（田口, 2020）。

以下、本稿では、このハイフレックス型の授業を、試行的に共通教育の英語（第3クォータの英語I）に取り入れた2020年度の実践と、正式に導入した2021年度の実践（第1クォータの英語I）について、それぞれの実践報告と学生へのアンケートから得られた知見、そして今後の課題と可能性についてまとめるものとする。

実践方法

2020（令和2）年度の第3クォータにおける試行的実施と、2021（令和3）年度の第1クォータにおいて正式に実施し

たハイフレックス型の英語のスピーキング（英語I）の授業実践について、その概要と実践後に行った学生へのアンケート調査の結果を中心に報告する。

①試行的実施

(1) 時期と実施に至った経緯

第3クォータ（10月～11月）は、政府主導による「Go To キャンペーン」が行われていた時期であったこともあり、第1クォータのように、緊急事態宣言が出されていた状況とは異なる授業方針が、大学から発出されていた。第3クォータの授業方針は、「感染予防を徹底して教室での対面授業を可能な限り実施する」となっていたため、例えば、教室定員の半分の受講生の登校を認める等、コロナ対策をした上での制限付き対面授業を行うこととなった。

本稿で報告する授業以外は、対面授業の他、オンライン会議システム（Zoom[®]）を利用した同期型の授業と学内の Learning Management System（LMS）である Moodle を利用した非同期型の課題で構成された1つの授業の受講生を2つのグループに分けた、いわゆる「分散型ハイブリッド」の授業を展開していた。詳細は、英語教育センター（2021）で報告しているので割愛する。

この第3クォータの開始直前の9月24日に、総合情報メディアセンターから、ハイフレックス型の授業ができるように教室環境を整備したとの連絡があり、試行的に利用したい教員の募集がはじまった。前述のように、対面授業の際には、半分の学生しか参加できないため、キャンパスに来たいという学生の要望に対応できていない側面と、他の学生の交流の機会が半減しているという実情があった。そこで、これらの課題に対応すべく、この募集に応募することにした。

(2) 使用機材及び教室、学生アシスタント

ハイフレックス型の授業を行うにあたり、以下の機材を用意した。なお、試行的実施の場所は、総合情報メディアセンターの1階にあるメディアホールであった。

図1は、メディアホールの教卓側に設置された機器の配

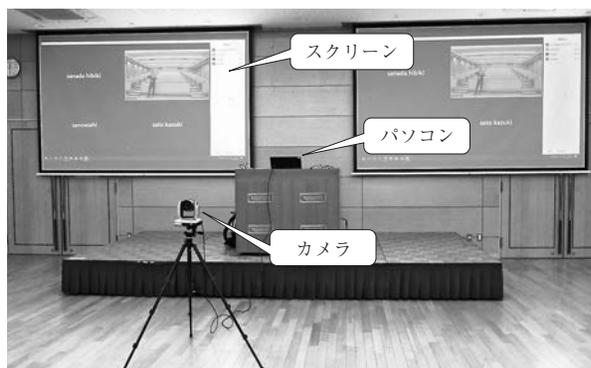


図1. 教卓側の設置機器

置の様子である。遠隔参加の学生が映し出されるスクリーンと、教員及び対面参加の学生を撮影するためのカメラを設置し、さらに、教卓には、オンライン会議システムのアプリケーションをインストールしたパソコンが置かれている。

図2は、対面参加の学生の発話を配信するためのマイクとそのマイクをパソコンと接続するための周辺機器である（詳細は、付録1, 3, 4を参照）。



図2. 教卓上の設置機器

図3は、ハイフレックス型の授業でペアワークを行っている際の様子である。対面参加の学生は、一定の距離を保って着席し、遠隔参加の学生の様子をスクリーンに映し出された映像で確認できるようになっている。一方、遠隔参加の学生も、対面参加の学生の様子が、オンライン会議システム上で確認できるように、映像と音声で配信されている。

対面参加の学生と遠隔参加の学生とのペアワークの際には、対面参加の学生は、密を避け、広いスペースのあるところで、遠隔参加の学生に英語で話しかけ、遠隔参加の学生は、パソコンの画面で確認しながら、自宅等からリアルタイムで応答することができるようになっていた。

なお、同時に操作しなくてはならない機器やアプリケーションが多く、初めてのハイフレックス型の授業であったため、それらの操作の補助ということで、学生アシスタント（SA）を1名、配置することにした。



図3. ペアワークの様子

(3) 手順

試行的な実践であったので、基本的に、他の同じ名称の科目の授業方法と同様に、計15回の分散型ハイブリッドの授業（受講者を2つのグループに分けて対面と Moodle による非同期型オンライン学習を交互に行う授業）の内、2回だけをハイフレックス型で実施することにした(表1)。

授業後に、Moodleのアンケート機能（匿名タイプの質問機能）を用いてインフォームド・コンセントを行い、同意が得られた学生に対して同じ Moodle 上で感想を聞くことにした。

授業に参加した学生は、工学部の1年生（履修登録者：29名）で、本実践研究の趣旨を理解し、アンケート調査に同意した学生は23名となった。なお、2020（令和2）年度入学生は、大学に入学の際に、パソコンの購入が必須ではなかったため、遠隔参加の際は、個人のスマートフォンやタブレット端末など、様々なデバイスでの参加となった。

表1. 授業実施スケジュールの概要

回	日付	グループ分けと授業方法	形態
第1回	10月2日(金)	合同オリエンテーション	通常
第2回	10月6日(火)	Group A: 対面, Group B: Moodle	分散型
第3～10回は、交互に分散型の授業を実施			
第11回	11月10日(火)	Group A: 対面, Group B: Moodle	分散型
第12回	11月17日(火)	Group A: 対面, Group B: 遠隔参加	HyFlex*
第13回	11月20日(金)	Group B: 対面, Group A: 遠隔参加	HyFlex*
第14回	11月24日(火)	Group A: 対面 (期末試験：口頭会話)	分散型
第15回	11月27日(金)	Group B: 対面 (期末試験：口頭会話)	分散型

* HyFlex：「Hybrid Flexible」の略称

(4) 質問項目及び結果

ハイフレックス型の授業を経験した学生の反応を確認するために、第12回と第13回の授業後に、Moodle上で、下記の3つの質問をした(表2～4)。以下、質問項目と回答結果をまとめて報告する。

表2. 問1の質問項目と回答内容 (n=23)

【問1】11月17または20日に実施した対面と遠隔を融合させた Hybrid Flexible (ハイフレックス) の授業に…。	11月17日	11月20日
対面で参加した。	13	11
遠隔 (Zoom [®]) で参加した。	8	12
参加せず、通常の遠隔 (Moodle の課題を行う) にした。	2	0

注) n の数は、それぞれの日付につき、履修者数の23名である。

基本的に、グループ分けに基づいて、対面参加と遠隔参加を割り振っていたので、それぞれの参加形態に合わせて、学生はハイフレックス型の授業に参加することになった。しかしながら、表2が示すように、遠隔 (Zoom[®]) で参加予定であった2名は、通常の非同期型の遠隔課題を選択した。

表3は、ハイフレックス型の授業に対する楽しさと、継続希望の有無、他の授業での実施の希望の有無についての回答結果である。対面か遠隔かの参加形態にかかわらず、ハイフレックス型の授業を体験した学生のほぼ全員が、楽しかったと回答している。一方で、この授業形態を続けることに対して、続けてほしくないという回答(延べ5名)と、他の授業では実施してほしくないという回答(延べ5名)もあった。

表3. 問2の質問項目と回答内容 (n=23)

【問2】11月17または20日に実施した対面と遠隔を融合させた Hybrid Flexible (ハイフレックス) の授業は…。(複数選択可)	11月17日	11月20日
楽しかった。	18	21
楽しくなかった。	1	1
続けてほしい。	4	4
続けてほしくない。	3	2
他の授業でも実施してほしい。	3	2
他の授業では実施してほしくない。	3	2

注) 複数選択可の質問なので、履修者数の23名を超えた回答数となっている。

表4は、自由記述形式でハイフレックス型による授業形態に対する学生の感想をまとめたものである。なお、上記の問2の質問への回答の理由とも考えられる記述がみられた。「続けてほしくない。」や「他の授業では実施してほしくない。」の理由として考えられるのが、タイムラグの他、画像や音声の乱れ、遠隔参加時のコミュニケーションの取り辛さと思われる。一方で、「楽しかった。」といった肯定的な回答の理由としては、他のグループ(クラス)の学生と交流できた点や、三密にならず一緒に授業を受けられた点が挙げられる。その他の注目すべき回答としては、遠隔参加の際のいわゆる「顔出し」についての記述である。試行的実施に際しては、ペアでの発表や発言する場合を除き、講義中は特に顔出しを強制することなく、参加した学生の意思に任せていた。顔を出していた方が、授業が充実する、あるいは、一緒に授業を行っているという実感がわくという回答もあるが、この点については授業参加者の本人確認の適切な方法等、全学的な議論が必要であろう。

表 4. 問 3 の質問項目と回答内容

<p>【問 3】対面と遠隔を融合させた Hybrid Flexible (ハイフレックス) の授業についての感想や今後の可能性を自由記述で回答してください。</p>
<p>11 月 17 日の実施後の感想 (自由記述)</p>
<ul style="list-style-type: none"> - 先生は授業が難しそうだったが、面白かった。 - 遠隔の人も顔出ししたらもっと授業が充実すると思った。 - すごい。 - タイムラグがひどくて内容理解が難しかった。 - 何回か動画が止まりスムーズに授業を受けられなかった。 - 声が時々聞き取りづらい [sic づらい]。 - 新しいと感じたが、対面だけ、Zoom だけとするほうがよかったかもしれない [sic しない]。 - この方法は三密にならない上に多くの人と一緒に授業することができるとこのコロナ期にはとても良い方法だと思った。 - ハイフレックスの授業形態自体は楽しかったが遠隔で参加している生徒のほとんどがカメラをオフにして参加していたので遠隔の人たちと一緒に授業を行っているという実感があまりわかなかった。 - 今までにない授業形態で楽しかった。
<p>11 月 20 日の実施後の感想 (自由記述)</p>
<ul style="list-style-type: none"> - 生徒の回線が悪いとグループを作るときなどにスムーズに課題が進まなかったりするということがわかった。 - このコロナ期の授業にとって最適な方法だと感じた。 - タイムラグがひどすぎて授業にないよう [sic の内容] の理解に苦しんだ。 - ハイフレックスの授業に遠隔で参加したことにより自分のクラス以外の人たちとも交流できたためすごく楽しかった。 - やはり対面に比べ、遠隔だとコミュニケーションが取りづらいと感じた。 - 前と同じである。 - 楽しかった。

(5) 試行的実施後の教員としての感想・反省点

次の 3 点をまとめとしたい。

まとめ①. そもそも、密となる状況を減らすために、クラスを半分にする必要がある状況で、非同期の課題を減らし、同期型の授業回数を増やすためにハイフレックス型を取り入れ、学生の希望 (交流の機会を増やしてほしい) に応えたいという教員側の意図があった。わずか 2 回という回数ではあったが、A と B の 2 つのグループの交流の機会が持てたことで、たくさんのクラスメイトと交流を持ちたいという要望には、応えられたのではないかと考えている。一方で、技術的には単なるカメラやマイクを利用したオンライン上の授業というだけではなく、Zoom[®] の機能をもっと活用すべきだった。例えば、Zoom[®] 等のオンライン会議システムのブレイクアウトルームという会議室内の個室を利用するなどすれば、さらに会話も交流も活発になったのではないかと思われた。

まとめ②. 次に、対面参加の学生は、自由なペアワークが許されているとは言えない状況だったので、教育効果という点では、対面参加をさせずに、全て遠隔同期型の授業

の方がよかったのかもしれないという感想を持った。授業をする側としても、パソコンやカメラの操作をしながら、対面参加の学生とオンラインで参加している遠隔参加の学生の両方に気を配りつつ、授業をしなくては行けないという、ある意味、高度なスキルとテクニックが必要であったので、不慣れな状態では、教育効果を下げかねないという課題も確認できた。ただし、この試行的実施では、SA を配置したことで、そうした操作に関する不手際は回避することができた。

まとめ③. 最後に、コロナ禍以前でも、このハイフレックス型の授業を行うことで、遠隔地キャンパスにいる学生にも授業を提供できたのではないかと反省している。ポスト・コロナ禍における授業デザイン在り方の課題となる。しかしながら、学生側で、双方向のやり取りをスムーズに行えるだけのスペックの個人用パソコンを持っている必要があり、その点を解決しないと、難しい側面もある。実際に、この試行的実施では、学生が持っているデバイスは、スマートフォンやタブレット端末、デスクトップパソコン等、様々であり、かつスペックも様々であったので、接続や音声、画像が途切れるケースなど、授業に支障をきたすようなこともあった。

②正式導入実施

(1) 時期と実施の背景

2020 (令和 2) 年度の試行的実施を踏まえ、2021 (令和 3) 年度は、第 1 クォータ (4 月～5 月) の「英語 I」において、正式にハイフレックス型授業デザインを導入し、実施することにした。前年度とは異なり、2021 (令和 3) 年度入学生は、一定のスペックのコンピュータを購入することが決まっていたので、受講者全員がコンピュータを所有しているという前提で、授業の内容と実施形態を決めた。

(2) 授業スケジュール及び担当学部

前年度よりも多くハイフレックスの授業を取り入れることにし、当初は、最初の授業オリエンテーションと最後の期末試験以外は、全てハイフレックス型の授業を行う予定であった。しかしながら、愛媛県内の感染拡大に伴い、4 月 19 日に発出された「愛媛大学 BCP レベル」の変更についての通知を受け、4 月 23 日以降の授業は、全て同期型のフルオンライン授業となった (表 5)。

表 5. 授業実施スケジュールの概要

回	日付	グループ分け	形態
第 1 回	4 月 9 日(金)	オリエンテーション/全員対面	通常
第 2 回	4 月 13 日(火)	Group A: 対面, Group B: 遠隔参加	HyFlex*
第 3 回	4 月 16 日(金)	Group B: 対面, Group A: 遠隔参加	HyFlex*
第 4 回	4 月 20 日(火)	Group A: 対面, Group B: 遠隔参加	HyFlex*
第 5 回	4 月 23 日(金)	Group A 及び B (フルオンライン)	同期型
第 6 ~ 12 回は、同様の授業を実施			
第 13 回	5 月 25 日(火)	Group A 及び B (フルオンライン)	同期型
第 14 回	5 月 28 日(金)	Group A (期末試験: 対面・口頭会話)	分散型
第 15 回	6 月 1 日(火)	Group B (期末試験: 対面・口頭会話)	分散型

* HyFlex: 「Hybrid Flexible」の略称

表 5 は、工学部の学生の授業スケジュールであるが、その他に、医学部及び法文学部の学生も担当していた。ハイフレックス型での授業実践は、これら 3 つの学部につき、第 2 回から第 4 回までの合計 3 回の実践にとどまった。

授業参加者は、工学部の 1 年生（履修登録者：20 名）と医学部の 1 年生（履修登録者：28 名）、法文学部の 1 年生（履修登録者：31 名）であった。これらの学生の内、本実践研究の趣旨を理解し、アンケート調査に同意した学生は、工学部が 10 名、医学部が 16 名、法文学部が 24 名の計 50 名となった。

(3) 授業の様子

使用した教室は、共通教育講義棟北別館の 4F にあるマルチゾーン型教室であった（図 4 及び付録 2 を参照）。教師を撮影するカメラを配置するための十分なスペースと、対面参加と遠隔参加する学生が、共有できる大きめのスクリーン、さらにそれを投影するためのプロジェクターやパソコン機材などがすべてそろっていたからである。対面参加の学生の声をひろうマイク及びその周辺機器は、試行的



図 4. マルチゾーン型教室での実施の様子

実施の際と同様であった。なお、正式実施では、オンライン会議システムに、Microsoft Teams[®] を利用した。

(4) 質問項目及び結果

ハイフレックス型の授業とフルオンラインの授業形態の両方を経験した学生の反応を確認するために、第 12 回と第 13 回の授業後に、Moodle 上で、ハイフレックス型の授業に関する 5 つの質問に回答してもらった。各学部の学生の回答結果は、表 6 ~ 9 に示す。なお、アンケートの実施に際しては、試行的実施の時と同様に、Moodle 上でインフォームド・コンセントを行い、同意が得られたデータのみを分析の対象とした。以下、質問ごとに結果を記述していく。

質問 1. これまでにハイフレックス型の授業を受けたことがあるかどうかを尋ねる質問であったが、3 つすべての学部の学生（ $n=50$ ）は、無いと回答した。

質問 2. 学生がハイフレックス型の授業を効果的と感じているかどうかを尋ねる質問には、学部間でばらつきはあるものの、合計でみると、半数以上が、効果的であると回答している（表 6）。自由記述による理由を見てみると、効果的であると回答した主な理由には、感染予防、授業の受けやすさ、質問のしやすさ、コミュニケーションのしやすさ、授業の質、の 4 つの項目に分類することができよう。複合的な要素を含む回答に、「教室内に入る学生の数を制限するのは、新型コロナウイルスの感染防止対策になるし、ハイフレックス型であれば、グループごとに授業の差が出ることなく進められるから。」との理由があった。どちらとも言えないと回答した学生の理由としては、「遠隔側の意識が集中しにくく、授業内容の理解が浅くなりがちであり、また、活動への積極性が薄れる。半面、今回のコロナが蔓延している状況での感染防止対策としては、生徒側もいくらか対面授業が受けられるため、いくらか有意義であるから。」といった、コロナ禍での大学教育に対するある種の妥協ともとれる意見が見られた。

表 6. 質問 2 の項目と回答内容（合計 $n=50$ ）

【質問 2】ハイフレックス型の授業は…。	工 $n=10$	医 $n=16$	法文 $n=24$	計
効果的である。	7	11	12	30
効果的でない。	0	2	0	2
どちらとも言えない。	3	3	12	18
効果的である主な理由（紙面の都合により、一部を抜粋）				
感染予防				
- 感染予防ができるから。				
- 密にならずに全員が授業に参加できるから。				
- 感染対策を取りながら対面授業同様の学習ができるから。				
- 対面の授業と大きな違いがなく、感染症対策になるから。				

授業の受けやすさ・質問のしやすさ

- 対面と遠隔を交互にすることで、遠隔授業の時にわからなかったことを対面で直接聞くことができるから。
- 授業が聞きやすい。
- 制約がある中で自主学习となるコマがなく、毎回授業に参加できたため、学習をより深めることが出来たから。
- システムとやり方がしっかりしていたので、リモートでも遅れなく学習することができたから。

コミュニケーションのしやすさ

- 対面で授業を受ける生徒は少人数になるが、それでも会ってコミュニケーションをとるのはとても刺激的であったから。
- 対面組とリモート組で別々のことをするのではなく、全員で会話できて一緒にじゅちよう [sic 授業] を受けている感じがよかった。
- コロナ禍により、人数を制限しなければならない中、ハイフレックス型の授業を取り入れることによって、オンラインの人も現場の臨場感をとらえることができると思ったからです。
- 英語を学ぶのは、直接相手と対面して話すのが1番効果的だと思うが、知らない相手だとお互い遠慮してしまう。そんな時にカメラ越しに繋がると、自然とその遠慮もなくなる気がしたから。
- 対面授業を受けている生徒とリモート参加者が同時に授業を受けたり、お互いにトークをしたりするのは非常にやりやすかったから。

授業の質

- 対面での人数も少なく済み、リモートでもペアワークなどの対面で行う活動ができるため。
- コロナ対策をしながらも対面の授業とさほど変わらない形で学習できたから。
- 全てオンラインの場合よりも授業を受講している実感が持てるから。
- 教室内に入る学生の数を制限するのは、新型コロナの感染防止対策になるし、ハイフレックス型であれば、グループごとに授業の差が出ることなく進められるから。
- 対面ではジェスチャーとかしやすいくけど、遠隔ではいろんな人と話すことができるのでどちらも良い面があると思ったから。
- 遠隔形式での授業で可能になることと対面形式での授業で可能になることの両方の利点を活かせるから。

効果的でない主な理由

意思疎通

- 意思疎通が対面とリモートでは困難。
- 対面のほうが相手の動きが分かるので話しやすかったから。

どちらともいえない主な理由 (紙面の都合により、一部を抜粋)

授業の受けにくさ

- どちらにも利点があるが、やり方を統一しないとやりにくい側面もあるから。
- 遠隔側の意識が集中しにくく、授業内容の理解が浅くなりがちであり、また、活動への積極性が薄れる。半面、今回のコロナが蔓延している状況での感染防止対策としては、生徒側もいくら対面授業が受けられるため、いくらか有意義であるから。
- 遠隔の人と対面の人ではお互いの雰囲気はわかりにくいから。

- 感染対策をしていながら、コミュニケーションを直接取れるところがいい。ただ、ペアの相手が通常の半分しかいないので相手が限られる。
- 遠隔で参加しているほうは、ブレイクアウトルームで毎回異なる人と会話できるが、対面ではずっと同じ人としか会話できないから。
- 全員が同じ空間にいる方がやりやすい。
- 完全オンラインであっても、先生がブレイクアウトルームに接続してくれることで、様々な人とコミュニケーションを取ることが出来るから。また、完全対面が完全オンライン化など統一したほうが個人的には、やりやすいと感じるから。
- 異なるグループの人たちとのやり取りより、対面同士またはリモート同士のほうがやり取りしやすかった。

機器のトラブル等

- teams を使うことでいろいろな人との会話が容易になるが、ネットワークエラーやネットのラグなどでコミュニケーションが十分に取れないこともあったから。
- 環境が完璧に整っている状態ではないと思ったから。特に音声やラグの問題など。
- 遠隔でも授業を受けることができる点は良いと思うが、回線が安定せず、授業に参加できないなどの問題もあるから。
- 授業を受けるにあたっての問題はないが、オンライン接続に不安がある。

質問 3. 自分に合う授業スタイルを問う質問であった。

合計で見ると、ほぼ半分ずつの割合で、対面もしくは遠隔(自宅)と回答している(表7)。対面の方が、都合が良いことの主な理由としては、相手の顔や目を見て話せるほうが話しやすいという、コミュニケーションのしやすさが挙げられていた。一方、遠隔の方が良いと回答した学生の理由としては、通学にかかるコストや時間の節約の他、様々な人とのコミュニケーションが取れることの利点が挙げられていた。ちなみに、Wi-Fi環境が安定していない学生のために、学内に遠隔授業用に開放しているスペースが設けられていたが、遠隔で授業に参加する際は、自宅からの参加の方が都合が良いということであった。

表7. 質問3の項目と回答内容 (合計 n=50)

【質問3】ハイフレックス型の授業では、どのタイプの授業参加が、自分にとっては都合が良いですか。	工 n=10	医 n=16	法文 n=24	計
対面	6	6	11	23
遠隔 (学内の別の教室等)	1	0	1	2
遠隔 (自宅)	3	10	12	25
遠隔 (カフェや無料の休憩スペースなど学外の公共施設)	0	0	0	0

対面の理由 (紙面の都合により、一部を抜粋)

コミュニケーションのしやすさ

- 人の目を見て話せるから。
- 遠隔では集中しにくく、授業外での交流の機会がなくなるため。

- 画面越しより会ってコミュニケーションをとることで仲が深まったため。
- 実際に相手の顔を見て会話できたほうが良いから。
- 相手の顔が見えたほうがいいと思うから。
- 実際に人と向き合って会話するほうが会話しやすかったから。
- 英語の授業では特に、表情が分かりやすくクラスメイトと直接会話ができるから。
- 英語力をつけるためには対面形式で相手の表情や声質などから感情を読み取るコミュニケーションが必要だと感じたから。
- 人とのコミュニケーションが取りやすいから。先生の話が聞きやすいから。

機器のトラブル等

- 遠隔だと回線の都合で声が聞こえないことがあり、思うように話が進まないことがあったから。

集中力・気持ち等

- 気を引き締めて、授業に集中して取り組めるから。
- 実際に人と顔を合わせた方がやる気の向上や頭に内容が入りやすくなるから。
- 家には授業以外のものに集中力を奪われることもあったが、対面だとその心配がなくなるから。
- 実家から通っていて、リモート中はいつも母が気遣って静かにしてくれているので、対面の方が親的にも楽なのかなと思ったから。
- 遠隔の授業が多いと精神面でも暗い気持ちになることが多く、生活リズムが乱れつつあるため。

リモートでの会話の不便さ

- リモートでは話すタイミングがわかりづらい。
- 分からないことがあるとき、授業中はどうしても聞きづらいため、対面だと授業の前後に聞くことができるからです。

遠隔（学内の別の教室等）

- 授業の前後に、他の授業で遠隔や対面などがあると、自宅と学校を行き来するのがほんとうに大変。遠隔で大学内で受けたいが、利用出来るスペースに人が多く、使えない時もあるのでそれもまた大変。

遠隔（自宅）の理由

移動時間の短縮や交通費のコスト削減

- 移動の時間を短縮できるから。
- 大学に行かずに受けられるから。
- 単純に近いのは便利だから。
- 出かけなくていいから。
- 自宅にいながら受けられたほうが移動に時間をとられないから。
- 移動時間・費用がかからないから。
- 教室までの移動時間が削減されるから。
- 松山に向かうまでの交通費が抑えられるから。

落ち着く・安心できる環境

- 一番授業を受けやすい環境だから。
- 大学まで登校しなくてすむのと、自宅からだとリラックスして受けられるから
- Wi-Fiの接続のやり方も一番わかっているし、机の上も広く使えるため。
- 対面で一回授業を受けた時、緊張してしまってあまり話すことができなかつたが、遠隔では自分の家で話すこともあるのか、緊張しなかつたから。

- 新たな学園生活の始まりで、周りは知らない人だらけだったので、オンラインでやることで知らない人とでも打ち明け合うことができたから。
- ソーシャルディスタンスなどを気にせずコミュニケーションがはかれるから。

様々な人とのコミュニケーション

- ペアワークやグループワークのときに、対面の場合席が近い人とやり取りすることになるが、遠隔だと様々な人とやり取りできるから。
- 異なる人と会話することができたから。

質問 4. ハイフレックス型の授業の継続を希望するかどうかを尋ねる質問であった。続ける方がよいと回答した学生は、合計の3分の1に満たない人数であった（表8）。続ける方がよいと回答した主な理由を項目で見ると、移動時間の短縮や交通費のコスト削減や対面参加ができる点、多様な選択肢が挙げられていた。一方、続けない方がよいと回答した主な理由は、対面授業に対するポジティブな学習観や対面参加と遠隔参加が混在することへのネガティブな意見、対面授業を受けたいという願望が挙げられた。

表 8. 質問 4 の項目と回答内容（合計 $n=50$ ）

【質問 4】 コロナの影響が出る前から、実はハイフレックス型の授業はありました。今後、コロナの影響がなくなった場合でも、この授業形態は…	工 $n=10$	医 $n=16$	法文 $n=24$	計
続ける方がよい。	2	7	5	14
続けない方がよい。	3	5	10	18
どちらとも言えない。	5	4	9	18

続ける方がよい理由（紙面の都合により、一部を抜粋）

移動時間の短縮や交通費のコスト削減

- 遠方から通っている生徒にとって通学時間をカットすることができるから。
- 対面も楽しいとは思いますが、東温に住んでいる人間としては交通費が高いという欠点があるので少しでも軽減してもらえたらありがたいから。
- 遠隔が主流の授業の後に対面の授業があると移動が間に合わない人もいるため。

対面参加ができる点

- 遠隔の方が私にとっては話しやすいのだが、完全リモートになったことで時々対面でも授業を受けたいと思ったから。

多様な選択肢

- 続けていけば効果も上げられると思し、選択の幅が広がるのはいいことだと思うから。
- 状況に応じて使えばいいと思う。
- 変化がある事で、勉強に対するモチベーションの維持がしやすかつたから。
- 自宅で授業に参加することができるため。

<p>様々な人とのコミュニケーション</p> <ul style="list-style-type: none"> - 対面授業だけだと席が固定化され、同じ人との会話しか起こらないから。 - いろいろな人と話すことができるから。 - 全部遠隔だとみんなに会えないから。
<p>続けない方が良い理由</p>
<p>対面授業に対するポジティブな学習観</p> <ul style="list-style-type: none"> - 直接会ったほうが会話が盛り上がる。 - ハイフレックス型だと授業で会うことができる人が少なく、交流の幅が広がらないから。 - 確かにネットでもコミュニケーションは取れるが、どうせならいろいろな人と対面がかかりたいから。 - 対面でする授業形態が最も授業らしいと思うから。通信大学ではないから。個人的に、対面で学習している人がいる中で遠隔の人の会話を聞くのは違和感があった。 - 対面のほうがしっかり評定がつけれると思うから。 - 対面授業のほうが緊張感が高まり、授業により集中できると思うから。 - 対面授業のほうが楽しいから。 - 1度コロナを経験してしまったのでせっかく対面授業で行えるならばわざわざ遠隔でする必要がないと思うから。
<p>対面参加と遠隔参加が混在することへのネガティブな意見</p> <ul style="list-style-type: none"> - 参加者に遠隔でない授業を受けられない、という場合には有効だと考える。しかし、それ以外は（ハイフレックス型という名の通り）中途半端であり、その分煩雑である。 - 目の前の人との会話に集中できるという意味ではリモートもよかったが、自分の出席が対面なのかリモートなのか気にするのは正直めんどくさかった。友達とのコミュニケーションを取りたいという思いもあるので個人的には続けないほうがいいが、メリットもあるので続けてもいい。
<p>対面授業を受けたいという願望</p> <ul style="list-style-type: none"> - 完全対面式での、大学の授業を受けていないため。 - 続けない方がいいというよりは、単純に大学に行きたいという思いから。 - これまで大学に行けていないので、コロナの影響がなくなったのであれば対面授業を受けたい。 - 対面授業が可能なら対面授業を受けたい。
<p>どちらとも言えない理由</p>
<p>両方に利点がある・質が同じ・差を感じない</p> <ul style="list-style-type: none"> - あまりどちらの差も感じなかったから。 - キャンパスと大学の距離が遠い人にとっては遠隔授業は効果的だが、対面の方が学習のメリハリができるから。 - ハイフレックス型の授業では対面もあるので完全オンラインよりは効果的に学ぶことができると思う。 - 対面形式でコミュニケーションをとることは非常に大切ではあるが、遠隔形式の授業では場所や時間を選ばないなどの利点もあるため。 - どちらでも対応することが可能であり、どちらでも問題はない。
<p>選択肢としての意義</p> <ul style="list-style-type: none"> - 生徒の選択肢として存在するのが大切だと思う。 - 授業の内容によって変えるといいと思うから。 - 遠隔での受講は便利であるが、対面でないとできないこともあるであろうから。

<p>対面授業に対するポジティブな学習観</p> <ul style="list-style-type: none"> - 対面のほうが授業内容が頭に残りやすいから。 - 良い面もそうでない面もあると思うので、スピーキングは対面にするなど状況によって使い分ける方がいいのかもしれないと感じたから。

質問 5. 4月下旬から完全オンラインとなったことを受けて、それまでのハイフレックス型の授業とオンライン型の授業を比べてどちらが、効果的だったかを尋ねる質問であった（表9）。医学部は、対面の際には、医学部のある重信キャンパスから城北キャンパスまで来なくてはならないという移動の問題があるので、完全リモートオンライン型を選択すると思われたが、そうではなかった。ハイフレックス型の授業の方が効果的であったと回答した主な理由は、授業中の緊張感・刺激・理解度の他、対面授業を受けたいという願望、遠隔だけの場合の会話の不便さを挙げていた。一方で、完全リモートオンライン型の方が効果的であると回答した主な理由は、やはり、移動時間の短縮や交通費のコスト削減や様々な人とのコミュニケーションが取れることを挙げていた。

表 9. 質問 5 の項目と回答内容 (合計 n =50)

【質問 5】4月中旬から、コロナの影響により、完全リモートのオンライン授業となりました。それまでのハイフレックス型の授業と比べて、どちらの方が効果的に学びましたか。	工 n=10	医 n=16	法文 n=24	計
ハイフレックス型	5	8	8	21
完全リモートオンライン型	1	4	6	11
どちらとも言えない。	4	4	10	18
ハイフレックス型が効果的である主な理由				
緊張感・刺激・理解度など				
<ul style="list-style-type: none"> - 完全リモートオンライン授業だと、家でパソコンを立ち上げてすぐに授業に参加できるのであまり緊張感がなくやる気が出ないから。 - 会ってコミュニケーションをとることはとても刺激的であったため。 - ある程度対面で活動を行えたほうが、周りから受ける刺激が強く、意欲が高まったから。 - 実際に人と会って話すこともあるため、緊張感を持ち授業に臨めたから。 - 個人的に、対面の授業に出ているときの方が集中できるため。 - やはり対面形式での授業のほうが理解度は高まるため。 				
対面授業を受けたい（人との交流を持ちたい）願望				
<ul style="list-style-type: none"> - 直接人と会えるから。 - 授業外での人との交流がいくらかあるため。 - 実際に会って話すことも必要だと思うから。 - 対面がある方が良かったから。 - 他の学生と交流ができるから。 - 直接対面での授業もあったほうが良かったと思った。 - 会話は面と向かって話すことがやはり楽しいので、対面の形式でも授業を受けたいと思ったから。 - 少し友達とも会って話したいから。 				

<p>リモートでの会話の不便さ</p> <ul style="list-style-type: none"> - リモートでコミュニケーションをとるのは難しいと思った。 - 対面があるほうがクラスメイトと話しやすかったです。リモートだとなかなかうまくコミュニケーションが取れない場合が何回もありました。 - 完全リモートは繋がりにくい時があるから。 - 完全リモートはどうしても距離を感じてしまう。 - リモートは通信状況などに左右されてやりづらいから。
<p>完全リモートオンライン型の理由</p>
<p>移動時間の短縮や交通費のコスト削減</p> <ul style="list-style-type: none"> - 移動の時間も短縮できるし、次の授業が対面なのかりリモートなのか悩むこともなくなるから。 - 松山市外に住んでいるため。
<p>様々な人とのコミュニケーション</p> <ul style="list-style-type: none"> - 完全オンラインだと皆同じ条件下で、ブレイクルームを活用してほとんどのクラスメイトとフランクに会話ができたから。 - 完全遠隔の方がランダムにグループ分けされるのでより多くの人と関わられたから。 - 色々な人と関わられたから。 - 決まった人だけではなく、ブレイクアウトルームを設けてくれることで、決まった人ばかりではなく様々な人とコミュニケーションを取ることが出来るから。 - コミュニケーション [sic] 取れる相手が多くなったから。
<p>対面参加と遠隔参加が混在することへのネガティブな意見</p> <ul style="list-style-type: none"> - ハイフレックスでは、実際の教室の音声はかなり聞き取りにくかったりしたから。 - ハイフレックス型であると、たまに通信障害が生じるケースがあるから。 - どうしても対面と遠隔ではラグがあるので、スムーズに授業が進んでいなかったと思う。完全リモートではそのようなラグが少なく、また、多くの人と会話することができたから。
<p>どちらも言えない理由</p>
<p>両方に利点がある・質が同じ・差を感じない</p> <ul style="list-style-type: none"> - オンライン授業ならどちらでもよい。 - どちらもよいので決められない。 - どちらにも違った良さがあるから。 - 効果の面で違いをあまり感じないから。 - 効果的かどうかという観点では、先生がリモート授業のほうも対面と変わらないくらいのスピードでしてくださったので、優劣をつけられないから。 - 対面で話す方がアイコンタクトが取りやすくて話しやすい印象だったが、完全リモートでは同じ人ばかりではなく、たくさんの人と話すことができたから。 - 英語に関しては対面の時と大差ない授業だったため、あまりわからないため。
<p>回数の少なさ</p> <ul style="list-style-type: none"> - 対面授業は最初の数回だけで、後は全部リモート授業だったので、どちらがいいかよく分からない。 - ハイフレックス型の授業を受けた回数が少ないのでよくわからない。 - 両方とも比較するほどの時間がなかったから。
<p>応用可能性</p> <ul style="list-style-type: none"> - スピーキングは確かにネットでも差し支えなく行えたが、ほかのリーディングなどの授業は同じようにできるとは限らないから。

(5) 正式導入後の教員としての感想・反省点

まず、このハイフレックス型の授業を導入しようとした大学を取り巻く環境、すなわち、学生の満足度を高めるために、大学構内での対面授業の回数を一定数確保しつつ、感染防止対策として、オンラインの遠隔授業（同期・非同期）も併用するというコロナ禍での授業実施条件を前提として、この実践を振り返りたい。

2021（令和3）年度は、第1クォータの4月上旬は、新入生にとって、初めての大学生活ということもあり、大学キャンパスに来て、新しいクラスメイトとコミュニケーションを取りたいという要望もあったため、分散型の授業よりも出会いが多くなり、かつ自主学習となる非同期型オンライン授業を減らして、同期型の授業回数を増やすことができるハイフレックス型を取り入れた。

学生のアンケート結果には、実際に会って話すことができる環境が提供されたことには一定の肯定的意見はあるものの、全員が同じ空間にいないということの不便さなど、否定的な意見もあることがわかった。実際に、キャンパスでの対面授業では、ペアワークは、周りに着席しているごく一部のクラスメイトとしか会話することができず、毎回同じペアとの会話になるので、刺激が少ないという回答があった。このことは、教員側からもあくまで主観的ではあるが、そのような雰囲気は感じられた。

一方、4月下旬からの完全オンラインとなった授業では、ペアワークは、Microsoft Teams[®]のブレイクアウトルームの機能により、ランダムにペアが決まるための、例えば、1クラス30人の授業であれば、自分以外の29名の誰かとペアを組むことになり、ほぼ毎回異なるクラスメイトとペアを組むことになった。様々なクラスメイトとコミュニケーションをとる機会を提供できたことについては、その状況を肯定的に受け止めているアンケートの回答も見受けられた（表9）。

しかしながら、コロナ禍で制限された大学構内での対面授業を希望する声は多く、会話の質についても、相手の表情やしぐさを確認しながらコミュニケーションをとることができる対面授業に対する肯定的意見も、より多く寄せられた。

なお、ペアやグループワークでの英会話のスキル・トレーニング活動を多く行う、いわゆる語学科目では、対面授業の場合、飛沫拡散のリスクを伴うため、十分な声量でのやり取りが厳しく制限された。本論文の冒頭で、同質性をキーワードとして、ハイフレックス型の授業の特徴を示したが、コロナ禍という特殊な環境のために、この同質性がゆがめられたことは否めない。一方、受講者同士の会話練習やディスカッションをあまり伴わない講義科目であれば、この同質性を十分担保できるのではないだろうか。

大学及び学生を取り巻く環境と条件によって、ベストではないが、「最適な」授業方法は、どのような方法である

うか、ということ念頭に、授業をデザインしなくてはならいと改めて感じた実践となった。「ニューノーマル」と呼ばれる社会・生活環境への適応が求められる状況において、コロナ禍のように、感染状況により、刻々と変化する環境・条件に合わせて、柔軟に授業方法をアップデートできるように準備する必要があるだろう。

今後の課題

試行的実践では、学生アシスタント (SA) 制度を活用して、ハイフレックス型の授業を成立させることができた。しかしながら、これは、採用した SA の機器操作スキルなど、学生個人の力量に負うところも少なくはない。オンライン授業の SA 向け講習などは心得だけではなく、スキルやノウハウの提供も今後行うことで、より発展的な授業を行うことができるのではないだろうか。

前述の通り、本来ならば、ハイフレックス型の授業デザインにおいては、学生は、大学構内での対面授業を受講するか、遠隔地からオンラインの同期型授業を受講するかを、自由に選択できるのである。今回はコロナ禍という特殊な環境・条件のために、大学構内への入構には、教室定員等、人数制限があったため、学生の自由な選択によって、受講スタイルを決めることができなかった。

ポスト・コロナ禍においては、このハイフレックス型の授業が、より一般的な授業受講スタイルの選択肢の一つとして、学生に提供できるようにしなければならないと言える。ポスト・コロナ禍は、コロナ前の授業スタイルへの回帰とはならないからである。

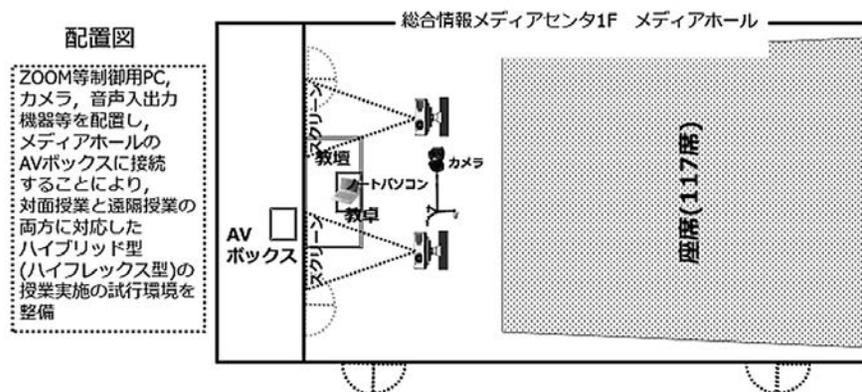
付記

本稿は、JACET2021 全国大会 (8月27日) にて発表した内容を論文としてまとめたものである。

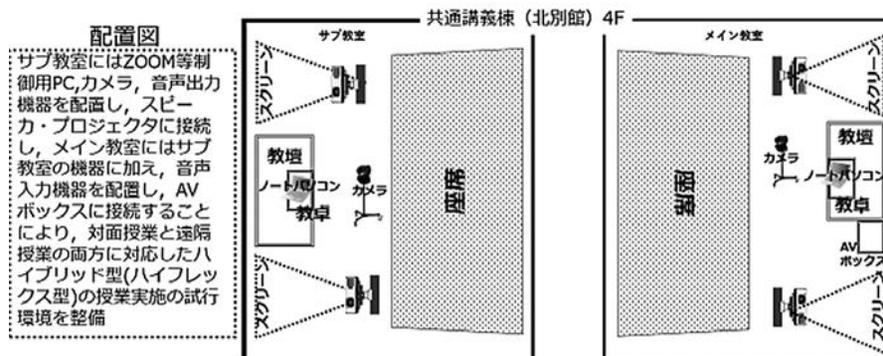
引用文献

- Beatty, B. J. (2019) "Hybrid-Flexible Course Design" *EdTech Books*. <https://edtechbooks.org/hyflex> (参照日 2021年11月26日)
- 英語教育センター (2021) 「新型コロナウイルス禍における必修英語科目の実践対応事例」, 『大学教育実践ジャーナル』第20号, 19-27.
- 田口真奈 (2020) 「授業のハイブリッド化とは何か: 概念整理とポストコロナにおける課題の検討」, 『京都大学高等教育研究』(26), 65-74.

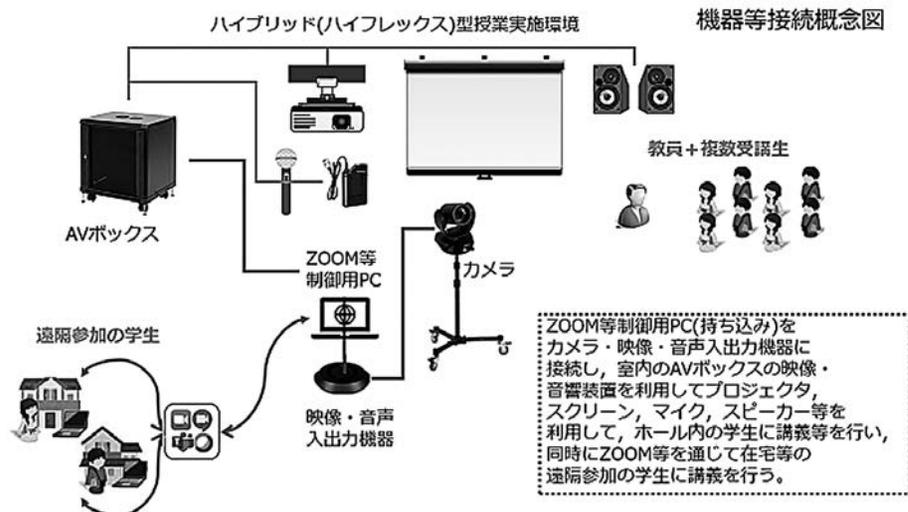
付録 1 試行的実施におけるハイフレックス型授業実施環境



付録 2 正式導入実施におけるハイフレックス型授業実施環境



付録 3 ハイフレックス型授業実施環境 (機器等接続概念図)



付録4 ハイフレックス型授業実施環境 (PC 接続図)

